湘南工科大学附属高等学校

令和四年度　入学試験問題

国　語

□部分がマークシート方式により解答する解答欄です。

マーク上の注意事項

1　HB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って、◯の中を正確に塗りつぶすこと。

2　答えを直すときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。

3　決められた欄以外にマークしたり、記入したりしないこと。

良い例	悪い例
●	線　小さい　はみ出し　丸囲み　レ点　うすい

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（作問の都合上、本文を改めたところがあります。）

「自然保護」という言葉があります。この反対は「自然破壊」です。どちらも、簡単に理解できるような気がしますが、そうではありません。たとえば、「農業は自然破壊かどうか」を考えるなら、「人間が生きていくのは自然破壊かどうか」という問題につながりますし、簡単に答えを出せないような気がします。

あるときに学者から「田んぼって、もともとあった自然を切り開いてこさえたのだから、自然破壊ですよね」と言われて、びっくりしました。「ちがうんじゃないかな。私は農薬も化学肥料も使わないし、田んぼには生きものもいっぱいいるし……」と反論したら、「それはとてもいいことですが、それらの生きものは、元々の自然ではなく、自然を破壊した田んぼという二次的自然に適応して生きているだけですよ」と説得されそうになりました。

この「二次的自然」という考え方は、田んぼは本来の自然とは程遠いが、まあ自然に入れてもいいと言っているようです。何か、自然を序列化して、優劣をつけているようで、いやな気持ちになります。元々の本来の自然とは何でしょうか。人間の手の入っていない「原生自然」のことのようです。そんな自然は日本にはほとんどないので、日本では本来の自然について話すことができなくなります。しかし、私はこれまでこの本で「身近な、身の回りの自然」と言ってきました。これは、自然と人間を区別しない、人間をも含んだ「天地」の意味で使っているのです。つまり[A]「人間の手が入ると自然ではなくなる」という発想が日本人にはありません。

田んぼの自然と山奥の自然は同じではありませんが、かつては自然として優劣をつけることはありませんでした。なぜ科学的な見方では、原生自然と人間が手入れした自然を区別するのでしょうか。暗黙のうちに、原生自然の方が身近な自然よりも価値があると思っているとしか思えません。これは[B]西洋由来の見方の影響でしょう。

このように自然を差別するようになったのは、「自然保護」の考え方の影響です。自然保護の思想には大きな問題が含まれています。C それは「原生自然」を守る運動として始まったからです。みなさんも「原生自然は守るべきだ」と思っていませんか。私もそう思います。しかし、そのために知らず知らずのうちに、「身近な自然」は後回しになるのです。

そこで、どうして自然保護の考え方が生まれたのか、その歴史をたどってみましょう。自然保護の運動はアメリカから始まりました。一七八七年にアメリカ合衆国が成立した後も、アメリカ人は西部開拓でつぎつぎと「原生自然」を開墾していきました。大規模な「自然破壊」が始まったのです（ヨーロッパもかつては森林に覆われていたのですが、とっくに開墾は終わっていました）。

アメリカの開拓では、原生自然は開拓者に立ちふさがる障害であり、これを切り開いて牧場や畑にすることが、フロンティアを広げていくことだと誇りに思われていたのです。つまり、それまでは、ヨーロッパでもアメリカでも、原生自然の開墾は、決して「自然破壊」だとは思われていなかったのです。

何よりも西洋で一番信者が多いキリスト教の教えでは、「神（唯一の神）は人間のために自然を造った」のですから、人間は自然を支配していいということになります。しかし、キリスト教がヨーロッパに行き渡る中世までは、木を切り、山を掘り、川をせき止めるときには、それぞれを守っている様々な神々に許しを得ることが必要でした。キリスト教ではこういう神々は異端だとして、無視されるようになったのが、自然が破壊された最大の理由です。

したがってアメリカでも、原生自然を開拓して入植していった百姓たちには、自分たちの行為を「自然破壊」だと思っていた人はいませんでした。ところが、開拓が終わり、めっきり少なくなってしまった原生自然を「国立公園」にして保存しようとする運動が始まりました。原生自然のすばらしさに触れた旅行者の提案によるものです。アメリカバイソンやネイティヴ・アメリカンたちが滅んでいることを嘆いた人たちの運動によって、一八七二年にイエローストーンがアメリカの最初の国立公園に指定されました。

私は「自然保護」は大切な考え方だと思います。しかし、日本で生まれた考え方ではありませんし、何よりもそこで暮らしている人間から生まれたものではないところに問題があります。また「原生自然」が本来の自然だとすると、人間の自然への働きかけは「自然破壊」ということになります。そして人間が手を入れた「少し破壊された自然」は、原生自然に比べて、質が劣ると見なされることになります。しかし、こういう考え方は間違っているような気がします。

原生自然を守るために始まった[D]「自然保護」は大きな壁にぶつかります。自然保護運動の成果として一八九〇年に国立公園になったヨセミテ渓谷にダムの建設が持ち上がったのです。ダム容認派は自然を賢明に利用する「保全」を訴え、反対派は自然そのものの「保存」を主張したのですが、一九一三年にダムの建設はアメリカ政府によって認められてしまいます。「保全」とは、人間のために自然を持続的に利用し続けることです。「保存」とは、人間のためではなく、自然のために自然を残すことです。この論争では、「保存」派の言い分が弱かったと言われています。[a]「保全」派の主張が人間のための実利を伴っていたのに、「保存」派の「原生自然」に手を入れてはならないという主張の根拠は、人間の感情や感性に訴えるだけだったのです。たしかに人間のための利益は簡単に見つかりますが、自然のための理由は、案外見つからないのです。[b]、西洋では人間は自然の生きものではないからです。[c]、この問題はこれで決着がついたわけではありません。現在でも形を変えて、続いているのです。「開発か保存か」「生かすか殺すか」「人間中心主義か自然の代理か」という問題は、じつは「人間は自然の一員か、そうではないのか」という問いを含んでいます。このことは倫理問題として、あらゆるところで顔を出すものです。

私はこの問題を、日本人の百姓として、[E]まったく別の見方で考えてみたいのです。その前に敗北した「保存」派の考えのその後を追ってみましょう。

一九七〇年代になると、それまでの自然保護の思想はまとめて「人間中心主義」だとして批判されるようになります。そこで人間のためではなく、自然のために自然を保護するための新しい理論がいろいろと出てきました。やっと「保存」の根拠を人間の感情や感性に求めるのではなく、自然そのものの価値で訴えることができるようになったと思われました。

まず一九七〇年代になると、[F]「自然の権利」という考え方が出てきます。動植物にも人間のように生きる「権利」があるというのです。また「動物の解放」論が唱えられます。人間の権利が男性から女性へ、白人から黒人や少数民族へ、健常者から障害者へと拡大・充実してきたように、人間から動物に「権利」を拡大すべきだという考え方です。それは、川や森も人間を後見人として裁判を起こすことができるという主張になります（日本でもアマミノクロウサギ裁判が一九九五年に起こされました）。また人間のために、動物を犠牲にして来た動物実験や工場的な畜産は生きものへの虐待だと批判されるようになりました。

さらに[G]ディープ・エコロジーは人間も含めて「すべての生きものの命は平等だ」と主張しました。これは従来のエコロジー（環境を守る運動）が人間の勝手を優先していたことを批判して、「もっと深い（ディープな）エコロジー」になろうと言うのです。これらの考えは、従来の「自然保護」があくまでも先進国の「人間中心主義」ではなかったか、と批判しているのです。

さらに、地球全体を生命圏とするような「ガイヤ仮説」「宇宙船地球号」「地球環境」という枠組みでの議論が広がっています。また「自然保護」運動ではありませんが、一九九五年頃から農業でも初めて「生命倫理」が登場してきます。それは「家畜の福祉」を実現する運動です。狭い檻（おり）に閉じ込められて飼育される家畜に同情して、家畜が生きものらしく生きられる環境を要求するものでしたが、日本ではあまり顧みられていません（日本でも有機農業の運動は一九七〇年頃生まれていましたが、自然環境への視点は未熟でした。私たちの「減農薬稲作運動」は一九七八年から始まり、一九九二年に「環境稲作」へと深まりましたが、広がりは限られていました）。

これらの考え方は、まとめて「環境主義」と呼ばれています。その内容はかなり異なりますが、人間以外の生きものにもま

なざしを向けた「生命中心主義」と、生態系全体にまなざしを向けた「生態系中心主義」だと言っていいでしょう。しかし、こうした環境主義も、これまで地位が低かった動植物に、どうにかして人間並みの境遇を与えたいという気持ちは共通してあるような気がします。人間中心主義を批判しているところは共鳴しますが、やはり最後は人間と人間社会をモデルにしてしまうのは、西洋思想の特徴ではないでしょうか。

しかし日本人の私としては、少し羨ましいと思うのです。人間のためではなく、自然そのもののために、人間が保護するという理論を懸命に考えていることに、私はひとまず敬意を払います（日本人の私はまったく別の考えを持っていることはこれから話します）。

（宇根豊『日本人にとって自然とは何か』）

問一　傍線部A「『人間の手が入ると自然ではなくなる』という発想が日本人にはありません」とありますが、どのようなことですか。次の中から最も適するものを選び、マークしなさい。

1　原生自然は日本にはほとんどないものなので、意識的に人間が手を加えないようにして作らなければ存在しないものであるということ。

2　自然は人間のために神が作ったものだと考える西洋と異なり、日本には神や人間が存在する前から自然は存在していたということ。

3　日本人にとって、自然は人間を含んだものなので、人間の関わっていないものを自然としてとらえることがなかったということ。

4　日本人にとっては、人間が手を入れたものが本来の自然であり、原生自然は生活に関わりがないものなので、そちらの方が二次的自然であるということ。

問二　傍線部B「西洋由来の見方」とありますが、どのようなものですか。次の中から最も適するものを選び、マークしなさい。

1　自然を守っている神々を異端として自然破壊を行ってきたことを反省したため、人間の手の届かない原生自然を最も貴重なものとする見方。

2　原生自然を開墾し、あまりにも少なくなってしまったために、自然への働きかけは自然破壊であると感じ、原生自然こそが価値のあるものだとする見方。

3　開拓者の前に立ちふさがる障害物である原生自然を破壊し切り開いてきたフロンティア精神を、原生自然を守るために使うべきだとする見方。

4　神は自然を人間のために作ったという考えから、人間は自然を守るためにつくられた、と考えるようになり、原生自然を大切にするべきだとする見方。

問三　傍線部C「それは『原生自然』を守る運動として始まったからです」とありますが、「自然保護の思想」が、「原生自然」を守る運動として始まったのはなぜですか。次の中から最も適するものを選び、マークしなさい。

1　人間の開発によって、原生自然が大きく破壊されてきたので、それを保存することが大事だと感じられたから。

2　自然を支配し開拓することが神に許されていることだとしても、自然を破壊することが悪いということは、分かっていたから。

3　開拓者精神を持つものにとって、まだ人間の手の入っていない場所は神聖な場所であるので、守る価値のあるものだと考えたから。

4　ネイティブ・アメリカンを滅ぼさないために、生活の場としての原生自然が必要だと考えたから。

問四　傍線部D「『自然保護』は大きな壁にぶつかります」とありますが、どのようなことがありましたか。次の中から最も適するものを選び、マークしなさい。

1　国立公園に計画されたダムの建設への反対が、人間のための実利がなく、人間の感情や感性に訴えるだけのもので、支持されなかったということ。

2　ヨセミテ渓谷に計画されたダムの建設への反対運動が、人間の利益を掲げなかったために理解を得られず、かえって自然破壊を広げてしまったこと。

3　国立公園であるヨセミテ渓谷に、自然保護の成果としてダムの建設の話が持ち上がり、建設容認派の人の意見が強く、ダムができあがったこと。

4　ヨセミテ渓谷にダムの建設計画が起こり、反対派の人たちは自然の「保全」を訴えたが、認められず、建設されてしまったこと。

問五　空欄 a ～ c に入れる語として最も適する語をそれぞれ選び、マークしなさい。ただし、同じ語が二ヵ所に入ることはありません。

1　なぜなら　2　しかし　3　つまり

問六　傍線部E「まったく別の見方」とありますが、どのような見方ですか。次の中から最も適するものを選び、マークしなさい。

1　「人間中心主義か自然の代理」かという問題を、「人間のための自然か自然の代表の人間か」とかみ砕いて考え、日本の風土に合った答えを出そうということ。

2　「人間は自然の一員か、そうでないのか」という問題を、自然を身の回りの自然としてとらえる日本人の見方で考えてみようということ。

3　人が自然とどう付き合うべきかという倫理問題を、自然の中に多くの神が宿ると考える日本人らしい世界観を持って考えようということ。

4　「開発か保存か」「生かすか殺すか」というとらえ方は、人間が自然を支配しようという姿勢なので、日本人らしく自然の流れに沿った考え方をしようということ。

問七　傍線部F「『自然の権利』という考え方」とありますが、どのようなことですか。次の中から最も適するものを選び、マークしなさい。

1　人間が自然環境の恩恵を受けるのと同じように全ての動植物が自然環境からの恩恵を受ける権利が与えられるとする考え方。

2　人間の権利が男性から女性へと拡大されてきたのと同じように全ての動植物に人間と同じように主張する権利を持たせようとする考え方。

3　人間に生きるために必要な権利が認められているのと同じように、動植物にもそれらの権利が認められるべきだとする考え方。

4　人間が平等に生きる権利を持っているのと同じように飼育、栽培されている動植物には平等に生きる権利を認めようとする考え方。

問八　傍線部G「ディープ・エコロジー」の考え方を実践した場合の例として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、マークしなさい。

1　魚釣りをするのに使う釣り餌の虫にも、本来の虫らしく生きる権利があるので、養殖したり、捕獲したりしてはいけない。

2　花を愛でるために切り花にしたり、枝振りを楽しむために枝を切ったり、たくさんの果実を取るために摘花をしたりしない。

3　犬や猫などのペットを人間の都合で売ったり買ったりはせず、勝手に交配して新しい品種を生み出したりしてはいけない。

4　肉牛には、栄養豊富な餌を食べさせ、ストレスがかからないように広い牧草地で、ゆったりと育てなくてはいけない。

問九　傍線部H「最後は人間と人間社会をモデルにしてしまう」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適するものを選び、マークしなさい。

1　動植物に与える権利を動植物自体に考えさせるのではなく、人間が動植物の代理として考えているので、どうしても人間の利益とつながってしまうということ。

2　動植物に人間と同等の権利を与えるのに、動物と植物では生活様式が違うので、それぞれを擬人化して与えられる権利を考えるということ。

3　動植物に人間と同じ権利を与えようと考えても、与える権利が人間を基準に考えているので、人間を中心に考えることから離れることはできないということ。

4　動植物に与える権利を、人間を代理人としてそれぞれに主張させることで、人間社会の権利主張の形をとっているということ。

問十　次の各文のうち、本文の内容に合うものには1を、合わないものには2をそれぞれマークしなさい。

A　自然保護の反対は自然破壊だが、農業は自然破壊と自然保護の両方の要素を持っている。

B　農薬や化学肥料を使わない田んぼは原生自然と同じである。

C　ヨーロッパでは、キリスト教が広まるまでは、自然を守っているさまざまな神様がいると信じられていた。

D　「保全」は人間のために自然を持続的に利用することであり、「保存」は人間のためではなく自然のために自然を残すことである。

E　「動物の開放」論は、人間の権利が、男性から女性へ、白人から黒人や少数民族へ、健常者から障害者へと広げられたのと同じように、人間の権利と同じものを動物に認めようとするものである。

F　西洋には、人間のためではなく、自然そのもののために環境問題を真剣に考えている人たちがいる。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（作問の都合上、本文を改めたところがあります。）

昔、愛宕（あたご）の山に、久しく行ふ聖（ひじり）ありけり。年ごろ行ひて、坊を出づることなし。[A] 西の方に猟師あり。この聖を尊みて、つねにはまうでて、物奉りなどしけり。久しく参らざりければ、餌袋（ゑぶくろ）に干し飯など入れて、まうでたり。聖、喜びて[B]日ごろのおぼつかなさなどのたまふ。その中に、ゐよりてのたまふやうは、「このほど、いみじく尊きことあり。[C] この年ごろ、他念なく経をたもちたてまつりてある験（しるし）やらん、この夜ごろ、普賢菩薩（ふげんぼさつ）象に乗りて見えたまふ。今宵とどまりて拝みたまへ。」と言ひけ[a]ればこの猟師、「世に尊きことにこそ候ふなれ。さらば泊まりて拝みたてまつらむ。」とてとどまりぬ。さて聖使ふ童のあるに問ふ。「聖のたまふやう、いかなることぞや。おのれも、この仏をば拝みまゐらせたりや」と問へ[b]ば、童は、「五、六度ぞ見たてまつりて候ふ。」

と言ふに[c]、猟師「われも見たてまつることもやある。」とて、聖の後ろに、いねもせずして起きゐたり[D]。九月二十日のことなれば、夜も長し。今や今やと待つに、夜半過ぎぬらんと思ふほどに、東の山の峰より、月の出づるやうに見えて、峰の嵐もすさまじきにこの坊のうち、光さし入りたるやうにて明かくなりぬ。見れば、普賢菩薩象に乗りて、やうやうおはして、坊の前に立ちたまへり[d]。

聖、泣く泣く拝みて、「いかに、ぬし殿は拝みたてまつるや」と言ひければ、「いかがは。この童も拝みたてまつる。をいをい、いみじう尊し。」とて、猟師思ふやう、聖は、年ごろ経をもたもち読みたまへばこそ、その目ばかりに見えたまはめ、この童、わが身などは、経の向きたる方も知らぬに、見えたまへるは、心は得られぬことなりと[E]、心のうちに思ひて[e]、このこと試みてむ、これ、罪得べきことにあらずと思ひて[F]、とがり矢を、弓につがひて、聖の拝み入りたる上よりさし越して、弓を強く引きて、ひやうと射たりければ、御胸のほどに当るやうにて、火をうち消つごとくにて、光もうせぬ。谷へとどろめきて、逃げ行く音す。

聖、「これはいかにしたまへるぞ。」と言ひて、泣き惑ふこと限りなし。男申しけるは、「聖の目にこそ見えたまはめ、わが罪深き者の目に見えたまへば、試みたてまつらむと思ひて射つるなり。まことの仏ならば、よも矢は立ちたまはじ。されば、あやしきものなり。」と言ひけり。

夜明けて、血をとめて行きて見ければ、一町ばかり行きて、谷の底に大きなる狸（たぬき）、胸よりとがり矢を射通されて、死して伏せりけり。

聖なれど、無知なれば、かやうに化かされけるなり。猟師なれども、おもんぱかりありければ、狸を射殺し、その化けをあらはしけるなり。

（『宇治拾遺物語』）

注　愛宕の山　…現在の京都市右京区嵯峨（さが）の北にある山。

聖　…山などにこもって修行する僧。
餌袋　…旅などの時に食べ物を入れた携帯用の袋。
ゐよりて　…座ったままひざを進めて近寄って。にじり寄って。
おのれ　…お前。
ぬし殿　…お前さん。
をいをい　…感動した時のことば。おお、おお。
罪深き者　…殺生を業とする罪深い者。
血を止めて　…血をたどって。

問一　波線部a～eの主語として最も適するものをそれぞれ次の中から選び、マークしなさい。
1　聖　2　猟師　3　童　4　普賢菩薩

問二　傍線部A「年ごろ行ひて、坊を出づることなし」の解釈として最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。
1　近頃お寺に出向いて、僧坊から立ち去ることはなかった。
2　長い間修行をしたのに、お坊さんになることはなかった。
3　長年の間修行をして、僧坊から出ることはなかった。
4　年ごろの童が迎えに行くと、お坊さんが出てくることはなかった。

問三　傍線部B「喜びて」とありますが、なぜですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

1　猟に出てとれた獲物をいつも持ってきてくれた猟師が、今回は、獲物だけではなく、飯ももってやってきたから。
2　いつもやってきては物をくれていた猟師が、しばらく来なかったけれども、飯を持ってやってきたから。
3　猟師が来ない間にあったうれしかったことを、ようやく猟師に伝えられると思ったから。
4　猟師が長い間何度もやってきてくれることから、聖に対する尊敬の心を感じたから。

問四　傍線部C「いみじく尊きこと」とありますが、どういうことですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。
1　長い間、ひたすら読経をしていたおかげで、夜になると象に乗った普賢菩薩を見られるようになったこと。
2　熱心に仏道修行をしていたおかげで、普賢菩薩の夢を毎晩見られるようになったこと。
3　長い間、お経をあげ続けた結果、この夜に念願であった普賢菩薩を彫り上げることができたこと。
4　熱心に読経をし続けていたところ、今夜普賢菩薩が訪ねてくるとのお告げがあったこと。

問五　傍線部D「いねもせずして起きゐたり」の解釈として最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。
1　落ち着かず起きたり座ったりしていた。
2　いてもたってもいられないで起きていた。
3　飯も食わずに起きて待っていた。
4　寝ないで起きて座っていた。

問六　傍線部E「心は得られぬ」とありますが、なぜですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

1　熱心に読経をしている聖には、経典の向きさえも分からないような者の気持ちはわかってもらえないと思ったから。

2　読経を長年続けてきた聖に見えるのはおかしくないが、経典を理解できない者にまで見えるのを不思議に思ったから。

3　経典を逆さに読んでいくことで、素晴らしい経験をすることができた聖の気持ちが理解できなかったから。

4　聖が長年熱心に経典を読み上げたおかげで、経典の向きさえも分からない者まで宗教心が芽生えたことを疑問に思ったから。

問七　傍線部F「罪得べきことにあらずと思ひて」とありますが、どういうことに対してそう思ったのですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

1　熱心に経を読んでいる聖に矢を向けること。

2　彫り上げた普賢菩薩を矢で壊してしまうこと。

3　象に乗った普賢菩薩に対して矢を放つこと。

4　周りをともしている火を矢で消してしまうこと。

問八　次の各文のうち、本文の内容に合うものには1を、合わないものには2をそれぞれマークしなさい。

A　聖の童は経典を読むことはできないが、普賢菩薩を見たことがあると猟師に話した。

B　夜になって東の空が急に明るくなり風が吹き荒れると、月とともに普賢菩薩が姿を現した。

C　普賢菩薩を見るや否や聖と童は、感動のあまり泣きながらともに手を合わせ拝んでいた。

D　経典を読めない童や殺生を行う自分に普賢菩薩が見えるのはおかしいと猟師は不思議に思った。

E　一夜明けて血をたどって谷を見ると、胸に矢が刺さった狸を発見した。

F　殺生をする猟師ではあるが、思慮分別があったので、普賢菩薩の正体を暴くことができた。

三　次の各問に答えなさい。

問一　次の熟語の構成として最も適するものをそれぞれ後から選び、マークしなさい。

a　予防　b　消毒　c　渡米　d　日没　e　非凡

1　上の字が下の字を修飾する　2　下の字が上の字の目的や対象を表す

3　上の字が下の字を打ち消す　4　上の字が主語、下の字が述語になる

問二　次の各文はいくつの単語でできていますか。その個数をそれぞれ後から選び、マークしなさい。

a　海がきれいだったので写真を撮った。

1　八　2　九　3　十　4　十一

b　タマが産んだ子猫は全部で三匹だった。

1　八　2　九　3　十　4　十一

c　彼女はとても笑顔が素敵な人だ。

1　八　2　九　3　十　4　十一

問三　次の傍線部a～eの動詞の活用の種類をそれぞれ後から選び、マークしなさい。

私はきびしい寒さを物ともせ[a]ず、二千里の遠方から二十余年ぶりで故郷へ帰って来た。

冬も真最中となった頃、やっとのことで故郷へ近づいた折から、天気は陰気にうす曇り[b]、冷たい風は船室の中まで吹き込んで来[c]て、ぴゅうぴゅうと音を立てている。船窓から外を覗(のぞ)いて見[d]ると、どんよりとした空の下に、あちらこちらに横たわっているのはみじめな見すぼらしい村であった。活気なんてものはてんであったものではない。自分の心には圧(お)さえ切れないうら悲しさがこみ上げて来た。

ああ、二十年このかた忘れる[e]日とてもなかった故郷はこんなものであったろうか。

（魯迅『故郷』）

1　ラ行五段活用　　2　カ行変格活用　　3　サ行変格活用

4　マ行上一段活用　　5　ラ行下一段活用

問四　次の四字熟語の空欄に当てはまる漢字一字をそれぞれ後から選び、マークしなさい。

a　異口同【　　】…多くの人が口をそろえて同じことを言うこと。

1　音　2　温　3　恩　4　穏

b　馬耳東【　　】…他人の意見や批評に注意を払わず、聞き流すことのたとえ。

1　富　2　封　3　夫　4　風

c　清【　　】潔白　…心が清くて私欲がなく、後ろめたいことのまったくないさま。

1　練　2　恋　3　廉　4　錬

d　優【　　】不断　…ぐずぐずして、物事の決断がにぶいこと。

1　重　2　獣　3　住　4　柔

e　五里【　　】中　…物事の様子や手掛かりがつかめず、方針や見込みが立たず困ること。

1　霧　2　務　3　夢　4　無

問五　次の短歌や俳句の作者名をそれぞれ後から選び、マークしなさい。

a　こんなよい月を一人で見て寝る

b　咳（せき）の子のなぞなぞあそびきりもなや

c　柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

d　死に近き母に添い寝のしんしんと遠田（とほた）のかはづ天に聞こゆ

e　「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

1　正岡子規　2　中村汀女　3　斎藤茂吉　4　尾崎放哉　5　俵万智

問六　次のａ～ｈの傍線部と同じ漢字を含むものをそれぞれ後から選び、マークしなさい。

ａ　お芋ばかり食べアきた。

1　ロウホウがもたらされる。
2　ゴミ処理場がホウワ状態になる。
3　神社に御輿（みこし）をホウノウする。

ｂ　お年寄りに席をユズる。

1　おジョウさんと結婚する。
2　ドジョウ汚染が深刻化する。
3　納得してもらえるようにジョウホする。

ｃ　失敗を慌てて取りツクロう。

1　ゼンイの行為が裏目に出る。
2　屋根をシュウゼンする。
3　給食のハイゼンする。

ｄ　重要な役割をニナう。

1　ガンタンに朝日を見る。

2　勝利を逃しラクタンする。
3　この事件をタントウする。

e　留学で国際感覚をツチカう。
1　バイリツが高くなる。
2　バイショウ金を支払う。
3　細菌をバイヨウする。

f　食生活が乱れて栄養がカタヨる。
1　映画のヘンシュウをおこなう。
2　フヘン的な考え方。
3　ヘンクツな性格。

g　母の言葉にハゲまされる。
1　チョウレイに出席する。
2　早起きをショウレイする。
3　コウレイのビンゴ大会。

h　彼の軽率な行動で迷惑をコウムる。

1　ヒガイ者に寄り添う。

2　特技をヒロウする。

3　暑さも寒さもヒガンまで。